

新学習指導要領とNIE

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部教授 谷田部 玲生



NIEの現在

NIE（エヌ・アイ・イー）とは、Newspaper in Educationの頭文字を取ったもので、「教育に新聞を」「教育における新聞活用」などとも呼ばれている。NIEとは、学校などにおいて新聞を活用して教育を行うことである。

NIEは、1930年代にアメリカ合衆国で始まったとされ、世界新聞協会（WAN）の調査によると2006年4月現在、世界64カ国で実施されている。わが国では、1985（昭和60）年新聞大会で提唱され、1990年代から本格的に推進され、2000年代以降広がりを見せている。新聞を資料として活用したり、新聞づくりをしたり、古くから新聞は学校教育の中で活用されてきており、授業における主要な教材のひとつである。

我が国においては、NIEが推進されていく中でさまざまな学習活動などが開発されて、広がりをみせている。NIEは、小・中・高等学校のみならず大学、生涯学習などにも広がっている。学校教育では、国語、社会、総合的な学習の時間などを中心にすべての教科・領域などで実践が進んでいる。

現在では、毎年夏に日本新聞協会が主催するNIE全国大会、秋には日本NIE学会の大会が開かれるなど、NIEの実践・研究などが進んでいる。また、全国各地でも教育界と新聞社が連携するなどして、研究会などを中心にNIEが推進されている。

さらに、各地の教育センターなどにおける現職教員研修、大学などで実施されている教員免許更新講習などにおいても、NIEが研修テーマとして取り上げられてきている。

新しい学習指導要領

新学習指導要領は、小学校は平成23年度、中学校は今年度、平成24年度から完全実施されており、高等学校では来年度、平成25年度より学年進行で実施される。今回の改訂では、これまでの理念を継承し、教育基本法改正などを踏まえ、「生きる力」を育成することを目指している。

今回の改訂の基本的考え方は、以下の3点である。

- ①教育基本法改正などで明確になった教育の理念を踏まえ、「生きる力」を育成する。
- ②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力などの育成のバランスを重視する。
- ③道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成する。

教育内容の主な改善事項としては、理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、道徳教育の充実、体験活動の充実、外国語教育の充実、言語活動の充実などが挙げられた。

言語活動の充実

前述した改善事項のひとつである言語活動の充実については、「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」（小学校学習指導要領総則）などとされている。

各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において重要な改善の視点

であり、国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実している。

国語科においては、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤である言語の果たす役割に応じた能力、感性・情緒をはぐくむことが重視されている。

また、各教科等においては、国語科で培った能力を基本に言語活動を充実することの必要性を十分に理解し、言語活動を各教科等の指導計画に位置づけ、授業の構成や進め方を改善するよう求めている。

文部科学省は、言語活動の充実のために、平成23年『言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】』、『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』を公表した。ここでは、思考力・判断力・表現力などをはぐくむ観点から、それぞれの教科等において言語活動を充実する際の基本的な考え方や、言語の役割を踏まえた指導について解説されており、参考となる指導事例が多数収録されている。

言語活動の充実と新聞

小学校学習指導要領国語では、第5学年及び第6学年「C読むこと」の②言語活動例として、「ウ 編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。」が挙げられている。これについて、文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』（平成20年）では、次のように解説している。

「新聞を取り上げ、編集の仕方や記事の書き方に注意して読む言語活動である。」

新聞は、多数の人々や広い範囲に配布されるメディアとして編集され、社会・経済・政治・産業・国際・教育・文化・スポーツなど多岐にわたる内容が取り上げられている。編集に当たっては、活字や図、写真などの大きさや行数、配置などを決める割り付けなどが行われている。記事は、逆三角形の構成と呼ばれることもあるように、結論を見出しで先に示し、リードから本文へと次第に詳しく記述されている。また、事件や出来事の報道記事だけでなく、社説・コラム・解説などの記事もある。このような特

徴を理解し、編集の仕方や記事の書き方に注意して読むことが大切である。」

NIEの今後

小学校では、単元のまとめなどの活動として新聞づくりが行われてきた。また、中学校・高等学校では、社会科などを中心に授業などで新聞記事などが教材として利用されてきた。教師が記事などを切り抜き、教師が教材として適切と考えるものを印刷配布するなどして、授業で使用方法が広く行われてきた。しかしこの方法では、教師側の記事などの恣意的な使用となる可能性を排除できない。

現在、わが国のNIEでは、新聞を丸ごと使用して、以下のような多様な学習が展開されている。

- ①スクラップや切り抜き、さらにはそれらを生かした探究学習などへの展開
- ②同じ事件や内容を扱った複数紙の記事や社説などの読み比べ
- ③社説や記事、投書欄などを活用した討論やディベート
- ④社会的な問題などについての新聞社への投書
- ⑤学習のまとめとしての新聞づくり
- ⑥新聞を家族で読んで意見を出し合うなどのファミリー・フォーカス
- ⑦新聞社見学、新聞記者への聞き取りなどに基づいて新聞を批判的に学ぶ学習

NIEは、言語活動の充実、新学習指導要領の趣旨の実現などに大きな役割を果たすことが期待されている。

また、「常時啓発事業のあり方等研究会」最終報告書にも述べられているように、NIEは主権者教育、有権者教育などの充実のためのひとつの重要な方法であることは間違いない。

やたべ れいお お茶の水女子大学附属高等学校教諭、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部総括研究官などを経て現職。社会科系教科教育、特に公民教育を主な研究分野としている。日本社会科教育学会理事、全国社会科教育学会理事、日本NIE学会理事・企画委員。

新聞が民主主義を育てる

～スクールジャーナリズムとNIEの融合

神奈川県立横須賀高等学校教諭 中根 淳一



NIE全国大会にスクールジャーナリズム分科会が誕生

「学校新聞の実践発表が紹介されたのは初めて。NIEで新聞を作ることが広がっていくと良い」。

昨年の7月末に青森市で開かれた第16回NIE全国大会の「スクールジャーナリズム」分科会に参加した教員の声だ。私が東京新聞に連載していた記事で当分科会の設置を提言したこともあり、この分科会が初めて設けられた。内容は、「スクールジャーナリズムとNIE～民主主義育成の原点」と題した私自身の基調報告と「学校新聞は今…向上高校『こゆるぎ』の舞台裏」と題した神奈川県私立向上高校新聞委員会の実践発表の2本。

前者では、「新聞は民主主義を創造し、育成する原点である。スクールジャーナリズムの活性化は学校の風通しを良くし、学校を民主化することに結びついていく。その関連で、NIEは活用術にとどまらず、民主主義社会の担い手を育成するという観点が必要である」と持論を展開した。

後者では、年8回の本紙と50回以上の速報紙の発行で、学校が活性化した状況が報告された。特に、1995年の阪神・淡路大震災以降、災害復興ボランティアを継続して特集するなど意欲的な活動が注目を浴びた。全国大会終了後には、東日本大震災の被災地へもでかけている。この発表は、スクールジャーナリズムによって学校や地域が生き生きしていく可能性を示した。

一方、2010年10月にスクールジャーナリズムの組織である第60回全国学校新聞指導者研修会で初めてNIEの分科会が設立された。昨年で2回目となり、学校新聞づくりとNIEの

関係について議論を深めた。

スクールジャーナリズムとは

ジャーナリズムとは、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、インターネットなどのメディアで時事的な問題の報道、解説、批評などを行う活動やその事業・組織を指す。取材に基づき事実を報道することがジャーナリズムの使命で、「真実」とは何かを伝授することがジャーナリズムの真髄であろう。そこには、権力におもねることなく、独立した批判精神が生きている。

新聞倫理綱領には「国民の知る権利は民主主義をささえる普遍の原理である。この権利は、言論・表現の自由のもと、高い倫理意識を備え、あらゆる権力から独立したメディアが存在して初めて保障される。新聞はそれにもっともふさわしい担い手であり続けたい」とあり、新聞が民主主義を創造、育成していく原点であることを掲げている。

学校新聞や校内放送など学校における報道媒体がスクールジャーナリズムだ。新聞が新聞倫理綱領で謳っているのと同様に、生徒が主体で作成する学校新聞はその中心的存在であるといえる。スクールジャーナリズムの活性化は学校の風通しを良くし、学校を民主化することに結びつく。つまり、新聞のない学校は、健全な民主主義が育たないのである。

さらに、授業における新聞づくりも広義のスクールジャーナリズムだといえる。

スクールジャーナリズムとしての学校新聞の歴史

戦後の学制改革以降、生徒の手による自主的な新聞が相次いで誕生した。背景にあったのはGHQ（連合国軍総司令部）の民主主義教育。学

習指導要領には「学校新聞」の項目が設けられ、全国で学校新聞や学級新聞が発行された。だが、その後の世界情勢の変化により、反共路線が強まり、1955年以降の学習指導要領で「新聞」の記述は減少。新聞教育への力は弱まっていった。さらに、受験激化、三無主義、活字離れなどの逆風により学校新聞は退潮していく。

一方、50年に生徒の自主的な学校新聞組織である全国高等学校新聞連盟（高新連）が発足した。顧問の教員の側では、日本新聞協会による「全国学校新聞指導教官講習会」が51年にスタート。当初、小中高教員を対象としたが、58年から小・中学校が発達段階の相違から全国新聞教育研究協議会に分離していく。

高校には83年に全国高等学校新聞教育研究会（全高新）、96年に全国高校文化連盟（高文連）新聞専門部が発足した。しかし、現在では、50年代にできた高新連のような生徒主体の全国組織はなく、高文連新聞専門部の生徒と顧問が一体化した組織運営になっている。

II スクールジャーナリズムの可能性

「僕たちの取材の力で学校が動くんだ」とは新聞に携わった生徒が発した言葉である。

私が以前、勤務していた学校の隣に30階建て高層マンションをはじめとする大規模宅地開発計画がもちあがった。この問題を掲示板で知った新聞委員が直接市役所に取材。顧問である私も同行した。学校が日照で大きな被害を受けることが判明し、工事は4年もかかり交通問題も深刻だった。新聞委員たちは早速この問題の特集した。反響は大きく、学校は業者に働きかけ説明会を開くことになった。以降、毎月発行の学校新聞で開発問題の特集を続けた。全校アンケートで生徒の一人ひとりの声を聞き、そのほとんどが計画に反対していた。地域やPTAの声も聞いた。こうして、「日照権を返せ」の声が広がっていった。まさに「新聞で風をおこした」のである。その後、リーマンショックによる不況の影響もあり計画は休止となった。

学校新聞はオピニオンリーダー性を持ち、提言し、学校さらには地域をより良く変えていく

力がある。新聞教育研究所の大内文一氏は、新聞教育の雑誌『新聞と教育』で、「新聞は作品ではなく働きである」「新聞で学校を作り、新聞で風を起こせ」と学校新聞の役割を強調している。

II スクールジャーナリズムとNIEの融合

新学習指導要領では「新聞」が随所に取り上げられるようになった。新聞活用のガイドブックや実践報告が続々と発表され、NIEは時流に乗っているかのようだ。

しかし、新聞を断片的に活用している状況では、新聞は教科にはならない。提示活用される新聞の切り込み方には教師の意図が入る。実践者の数だけ教材がある。新聞そのものも、販売戦略があり、新聞社によって主義主張が違ふこともある。

さらに、新聞を過信することは危険だ。ジャーナリズム全般に言えることだが、新聞自体が権力化する。また、戦時中のように国家権力の弾圧を受け、御用新聞に変質することもある。この点は、スクールジャーナリズムも同様である。

健全なるジャーナリズムは、批判精神を醸成させ、民主主義と同様、不断の努力が重要だ。一方、読者もメディアリテラシーを磨いていくことが必要である。

戦後間近に導入された「学校新聞づくり」＝スクールジャーナリズムは、民主主義教育そのものであった。新聞をつくることにより表現の自由を生徒が体得し、読者に知る権利を保障する。この民主主義の原理について、学ぶことこそ、NIEのもう1つの目的である民主主義社会を構成する市民の育成に結びつく。

スクールジャーナリズムとNIEは別個のものではない。民主主義の創造・育成を担う原点として、さらに融合を図っていかなくてはならないのである。

なかね じゅんいち 1956年生まれ。全国高文連新聞専門部、全国高校新聞教育研究会常任理事。2009年10月～2012年1月、東京新聞に「スクールジャーナリズムとNIE」を連載。主著（共著）に『NIEハンドブック』（日本NIE学会、2008年）、『新聞教育ルネサンスへ』（白順社、2012年）ほか。

知事選模擬投票に取り組んで ～ NIEの実践を通じたシチズンシップ教育

長野県下諏訪向陽高等学校 学校司書 松井 正英



社会へと通じる小さな窓としてのNIE

長野県下諏訪向陽高等学校は、生徒数約600名の全日制普通科高校である。本校に限ったことではないが、新聞を毎日読むという習慣がある生徒は、実際のところそれほど多くない。学校や友だちを越えた世界への関心が少ないのかもしれない。

しかし、高校生であっても政治の影響を受けているし、学校を卒業すれば社会に否応なくさらされる。そんな生徒たちに、新聞をはじめとしたさまざまな資料や情報を提供することで、社会へと通じる小さな窓を開きたい。そんな思いで、2009年度から2年間、当時の図書館担当教諭が中心になってNIE実践指定校に名乗りをあげ、実践をおこなってきた。その教諭が、1年目の終わりに異動したため、2年目は私が担当を引き継ぐことになった。本稿では、その中から知事選模擬投票の取り組みについて紹介したい。

模擬投票で選挙に関心を

模擬投票は、2009年の衆議院総選挙と2010年の長野県知事選挙のときに実施した。

模擬投票で生徒に期待することはいくつかあるが、まず何より、投票行動を通して選挙そのものに関心をもってもらうことである。さらに、誰に投票するかを考え、決定するプロセスを通して、社会のあり方や具体的な政策課題に関心をもち、自分たちにどう関わってくるのかを考えるきっかけになってほしいと考えた。そして、この擬似体験が民主主義社会の一員としての自覚へとつながっていくことを期待した。

模擬投票のときには、できるだけ本当の選挙の雰囲気を味わってもらうために、投票所を本

物らしくつくった。投票箱は実際のものを地元選挙管理委員会から2つ借り、投票用紙も本物の体裁に似せて作成した。投票箱の中で自然に開く特殊な紙までは、予算的な問題で入手できなかったのが残念である。

模擬投票は、どちらも現代社会の授業の中に位置づけておこなったので、投票の対象にしたのは1年生だった。しかし、1年目の総選挙のときに、2・3年生から自分たちも投票したいという声が聞かれた。そこで、知事選挙では1年生の現代社会をベースにしながら2・3年生も自由に投票できるようにした。

模擬投票に向けての取り組み

模擬投票は、投票を体験すること自体にも意義があると考えているが、もちろんそれに向けての取り組みは欠かせない。私の場合、直接授業を担当しないので、関連する教科である地歴公民とどう連携していくか、図書館として何ができるか、の2つが課題だった。

図書館としては知事選関係の資料や情報を整え、授業や生徒に提供していくしかないと考えた。ただ、学校教育の場で選挙を扱うときには、とりわけ政治的中立の点で配慮が求められる。幸いなことに、実践に際してはどこからもクレームがなかったが、資料を収集・提供するにあたっては十分に気をつけてきた。

まずは、県知事選挙に関する新聞記事をすべて切り抜いてファイリングするとともに、コピーを現代社会担当者に毎回渡した。ファイルのほうは閲覧室に置いたものの、残念ながらあまり利用されなかった。一方、現代社会の授業では、記事の内容によっては、授業の冒頭でそのことに触れてくれていたようである。

さらに、これはという記事は「おたより」に

して、全校生徒に配布した。選んだのは、長野県が抱えている課題をまとめた記事や、候補者が出揃ったところに各候補を紹介した記事、模擬投票直前に載った各候補のマニフェストの記事などである。1年生は現代社会の授業で配布してもらい、授業の中でも取り上げてもらった。2・3年生はクラス担任を通して配布したが、こちらもクラスによっては朝や帰りのホームルームで触れてくれていた。

また、生徒に少しでも関心をもってもらうには、ただ先生の話の聞いたり、配られた記事に目を通したりするだけでなく、自分で手を動かすことも必要だろうということになった。そこで、現代社会担当者と相談して、作業シートを作成した。候補者の政策発表をまとめた記事数種類を資料にして、生徒が埋めていくものだ。内容は、知事選挙の告示日や投票日、候補者の名前やこれまでの役職、そして政策や考え方についてだった。政策の部分は、候補者ごとに記事の文章をいくつか抜き出して、重要な言葉を空欄にし、資料を読みながら埋めていけるようにした。このシートは、1年生の現代社会はもちろん、2年生の世界史や3年生の政治・経済の担当者も授業の中で取り組んでくれた。生徒たちが発表や意見交換する機会を、授業の中に取り入れたいという思いはあったが、時間的に厳しく、また政治的にデリケートな問題を含むこともあり、今回は断念した。

これらの学習をもとに、模擬投票では、漠然と候補者を選ぶのではなく、どんな理由から選ぶのかを意識してもらおうと、投票用紙に選んだ理由を答える欄を加えた。具体的には、「新しい県知事に力を入れてほしいこと」についていくつかの選択肢を用意し、そこから選んで答えてもらった。

実際の選挙とは異なった結果

投票率は、1年生は授業で実施したので96.6%、2・3年生はそれぞれ26.4%、22.4%で、全体では48.9%だった。もう少し投票してほしかったというのが本音だが、任意投票の2・3年生も4分の1が参加してくれたと自分に言い

聞かせている。

今回の知事選は争点があまりはっきりせず、具体的な政策課題への関心という点ではむしろ少なかった。ただ、模擬投票で当選したのが、実際の選挙とは別の候補者だったのは興味深かった。選ばれた候補者はとくに教育や福祉に力を入れたいと主張していたのだが、多くの生徒が「新しい県知事に力を入れてほしいこと」として、「教育」「高齢者福祉や医療」を挙げていたことと無関係ではないだろう。また、ほかの2人の候補者は、実際の選挙では、政党などの組織的バックアップも結果に影響したと考えられるが、生徒にとってはそれがほとんど考慮の要素にならないことも、模擬投票の結果にあらわれたのではないだろうか。

もう1つおもしろかったのは、取材に来た新聞記者のインタビューに答えている生徒の様子だった。取材された生徒は、それに答えるためにその場でいろいろなことを考え、それをきっかけに新しい問題意識を自らの中に芽生えさせたのではないかと、傍らで聞いていて感じたのだ。本物の記者による取材という、現実そのものがもつ力について実感させられた。と同時に、学校の日常の中で、こうした問いかけがもっと必要だと感じた。

選ぶのは自分という自覚

生徒が新聞を通して社会のできごとに関心をもつようになるには、単発的でなく日常的な取り組みが必要だ。しかも、生徒が社会と自分との間に接点を感じるという視点が大切になるだろう。

多様なメディアにさまざまな情報があふれている今、その中から必要なことを読みとり、考え、判断し、選択する力がますます求められている。しかしその前に、選ぶのはほかの誰でもなく自分なのだ、という自覚をもってもらうところから、シチズンシップ教育は始まると感じている。

まつい まさひで 1963年生まれ。名古屋大学法学部卒。1986年から、長野県の高校に学校司書として勤務。長野県NIE研究会会員。

大学生の新聞離れとNIE

法政大学沖縄文化研究所 国内研究員 目黒 博



6年前の春、名古屋外国語大学で日本外交史や国際関係などを教え始めたとき、私はほとんどの大学生たちが新聞を読まず、ニュースもあまり知らないという現実と直面した。それまでの10数年間、メディアの中で働いてきた私にとって、新聞を読むことはごく当たり前のことだったので、これは衝撃であった。

新聞を読まず、ニュースを知らないということは、社会に関心がないことを意味する。その学生たちもじきに卒業し、社会人になり、やがて結婚し、子供を育てる。こうして、新聞を読まず、社会に関心ない家族が生まれることになる。もし将来、社会人の大多数が社会に関心を持たなくなるとしたら、日本はどうになってしまうのか。大学生の新聞離れは私にとって大きな課題となった。

新聞離れの背景と危険性

新聞を読まない人たちは、大きく分けて3つのグループに分けられる。まず、社会への関心が薄く、読む必要性を感じないグループ。2つ目は、内容や表現が理解できないから読まない、あるいは読めない人たち。3つ目は、ニュースに関心はあるが、パソコンやTVで十分だ、特に携帯があれば、いつでも、どこでも手軽にニュースがチェックできるので新聞は必要なしと考えるグループである。この最後のタイプが最も深刻なケースである。新聞が潜在的な読者を失っているからであり、今もその数が増えつつあるからである。

パソコンや携帯で読めるネットのニュース記事は、ポータルサイトに現れる見出しリストをクリックすれば無料で読める。しかも、それぞれの記事には関連記事のリンクが張っており、さらに多くの記事が読める。これは魅力的であ

ろう。しかし、このプロセスには切りがなく、1つのニュースの中にのめり込み、底なしのタコツボにはまり込んでいって、社会の全体像が見えなくなってしまう危険性がある。

一方、TVは自動的にニュースを流してくれるので、大変気楽で便利なメディアである。だが、映像に依存しがちで情報量は少ない。また、映像は時に衝撃的であり、視聴者が情緒的に反応しやすく、放送局もその傾向を煽って視聴率を稼ごうとするため、事実をゆがめて伝えてしまうことも多い。

私は、新聞以外のメディアはすべて有害無益だ、などと主張しているわけではない。優れたTV報道番組もあるし、ネットでアクセスできるブログやツイッターなどの中には、新聞では報道されない貴重な情報を伝えているものも少なくない。その好例が大震災・原発災害に関する情報であろう。ただし、TVやネットだけでニュースを知る人は情報の取り方が偏りやすく、社会全体を俯瞰しない傾向があることも指摘しておきたいのである。

現在の社会には情報があふれている。だが、あまりにも多くの情報が出回り、信頼すべき情報の基準が明快でないとき、目立つもの、わかりやすいもの、自分の好みに合うものに心を奪われやすくなる。こうした状況は今や世界中に広がっているが、危険な状況でもある。最近顕著なポピュリズム政治（人気とり政治）はその典型例であろう。今、あふれる情報を整理する、信頼できるメディアが必要であるが、それは新聞であると思う。

新聞の特徴

なぜ新聞なのか。新聞の最大の特徴は、紙面が大きいことである。新聞を広げるとA4用紙

8枚分のスペースが現れる。さらに紙面を繰っていくと、写真や見出し、地図や図表などを通して、ありとあらゆるニュースが目飛び込んでくる。紙面サイズの大きさと雑多性・多様性、それゆえの俯瞰性とバランスは他のメディアにはないものである。また、新聞の特徴には継続性・習慣性というものもある。重要な事件ほど続報が多く、継続的に読むことでその流れがつかめる。逆に毎日読まないとう理解しにくい記事も多い。毎朝起きて歯を磨くように、新聞が生活の一部となって初めて「新聞らしさ」が発揮される。

新聞を使った授業例

大学は、専門的教養を身につけた知的市民を世に送り出す役割が期待される。「教養」は基礎的な知識であると同時に、幅広い関心とバランスのとれた判断力を伴うものであるが、「専門性」は特定の分野やテーマを深く掘り下げることで身につくものである。

教養教育と専門教育の両方を行う大学では、一般に、新聞を読むことは精神生活の前提であり、勉強や研究以前のものと見なされる。つまり、新聞を毎日読む習慣などは、本来高校で身につけるべきものであり、大学はより高度な教育を行う場であるとされる。だが、現実にはほとんどの学生は新聞を読まない。

そこで私は、すべての授業で新聞を取り上げることにした。大教室などで行う講義形式の授業では、毎回冒頭で過去1週間に起きたニュースについて学生に質問した。また、重要なニュースについては、その内容と背景を解説した。理解できて初めて興味が湧くし、興味を持てば自然と新聞を手取るようになるからである。私の質問に答えられず悔しがって、新聞を手取るようになった学生が少なからず出てきたので、この方法は効果的であったと思う。

少人数クラスのゼミでは、毎回過去1週間に各自が読んだ新聞記事の見出しリストを提出させた。同時に、特に注目した記事の内容を簡条書きさせ、それをもとに1～2分で記事を紹介させた。ゼミの中心はあくまで国際関係につい

ての研究発表であったが、並行して新聞を読み、分析する課題も与えたのである。このように、私のゼミは新聞と研究発表を組み合わせたものであったが、次第にその両者は連動していった。自分の研究テーマに関連のある新聞記事に自然と目を向けるようになったからである。たとえば、朝鮮半島を研究テーマに選んだ学生は、韓国や北朝鮮に関わるニュースは小さいものでも見逃さなくなった。毎日、無意識のうちに朝鮮半島関連のニュースを探すようになったからである。

新聞から教養と専門へ、そして批判精神へ

大学生である以上、単に新聞を毎日読むというレベルから一歩進んで、深く読むスキルも身につけてほしいものである。私のゼミでは、学生たちに記事の文章の主語と語尾をチェックさせ、誰が何をし、何がどうなったのか、さらには、その記事の情報源は何だったのかを考えさせた。とりわけ、普段は何気なく読み飛ばしてしまう「～政府筋によれば」「～という情報もある」というような表現も、記事を書いた記者がどのような人に取材して書いたか、いろいろと想像するための良き素材となる。ときには学生が読んだ記事の情報源のあいまいさを指摘することもあった。このような読み方は、誰が、どのような発言を、なぜしたのかを考える習慣、つまり批判精神を身につけることにつながる。

大学生は、新聞を毎日読むことを通して社会に幅広い関心を持ち、さらにそれを超えて最も関心の持てるテーマを深く勉強してほしい。この2つの方向性は、教養と専門につながる。教養を幅、専門を深さとすれば、T字型の勉強スタイルと呼ぶこともできる。そのスタイルを確立したとき、自立した知的市民として社会に羽ばたく準備ができたのだと思う。

めぐろ ひろし 1947年生まれ。東京大学経済学部卒。米国インディアナ大学大学院修了（言語学）。NHK情報ネットワーク国際研修室プロジェクト・ディレクター（国際情勢コース・メディア論コースなどの職員研修担当）、名古屋外国語大学現代国際学部教授（2006～2012年）などを経て現職。

しんぶん井戸端会議

～新聞を楽しむ・新聞から学ぶ

熊本県宇城市中央公民館自主講座学級長 古賀 結美子



公民館講座から自主講座へ

私は以前から新聞やNIEへの関心が高く、県内各地で開催されるNIE講座の案内が新聞などに掲載されるたびに、どこかの講座を受講させてもらえないだろうかと思っていた。

そんな折、私の居住する宇城市中央公民館主催で「新聞でいきいきライフ」という講座が開講されるのを市広報で知り、飛びついた。2009年11月のことである。講座は毎回、講師の手づくり資料に基づいた受講生参加型で行われ、楽しく学ぶことができ、未知のことを知る喜びとなった。

この講座は2010年3月に終了したが、このまま「学びっぱなし」ではもったいないと思い、受講生たちが継続して学び合える場づくりを考えた。「講座のノウハウを生かし、引き続き自分たちでやってみよう」と、公民館講座から自主講座に移行したのは5月のことである。「新聞を読んだら誰かに伝えたい、語り合いたい。持ち寄った新聞記事で自由に雑談しよう」、そんな軽い気持ちで月2回、公民館に集まっていた自主講座「しんぶん井戸端会議」が始まった。

自主講座の活動

メンバーは60歳代の男女10人で、各自、新聞記事を持ち寄り、それを選んだ理由と感想を述べ、他メンバーの意見や感想を聞くというやり方でスタートした。その頃、宮崎県で「口蹄疫問題」が起こり、「29万頭の犠牲、胸に刻んで」という社説や、「被災地、悲痛な叫び」という見出しの記事が話題になり、テーマとして採り上げた。

2010年6月15日付、熊本日日新聞に、「48年に1度、咲いた、実った」という見出しで「水俣市の竹林園でインドの珍しい竹が半世紀に1

度という鶏卵大の実を付け、関係者を驚かせている」という記事が載った。早速、メンバー10名で「竹の実ツアー」に出かけた。竹林園には、国の「水俣病情報センター」、県の「環境センター」、市の「水俣病資料館」がある。珍しい竹の実を見た後「水俣病資料館」を見学。あらためて、水俣病を再認識することとなった。それから1カ月後、「水俣の中学生に差別発言」という見出しで水俣の中学生が、県内の中学校とのサッカーの練習試合中、相手側の生徒から「水俣病、触るな」と差別的発言を受けたという記事が掲載された。この記事を基に人権、差別、教育問題等を語り合った。教育問題では、同時期「娘、洗濯機に入れて回した」の見出しで載った記事で、「幼児虐待」について家庭、学校での躰についても話し合い、いろいろな意見が出た。

通常例会のほかに、熊日新聞の「新聞博物館」、九州電力の「太陽光パネル・メガソーラー発電所」「地熱発電所」、そして「老人介護施設」の見学など、外部に出かける学びも取り入れた。新聞博物館では、新聞の歴史と新聞が私たちの手元に届くまでの工程を知り、発電所見学では原子力に頼らない新エネルギーの可能性を考えた。老人介護施設見学後、「私が考える理想の老後と現実」というテーマでそれぞれの思いを出し合った。

また、熊日新聞宇城支局長を招いて、地域の話題をどう取り上げ、地方紙としての役割を担っていくのかなどのお話を聞く機会も設け、新聞をより身近に感じる事ができたように思う。

日本新聞協会が募集した「ハッピーニュース2010」にもメンバー12名が応募した。誰も入賞には至らなかったが、応募を決めてから各自、新聞に目を凝らし、ハッピーになる記事を探してそれを文章にしたということに意味があると



思っている。

昨年9月から、私は熊日新聞のモニターとなった。モニターの役割には、新聞社が毎月尋ねてくる課題に回答する「課題通信」と、紙面への感想・意見などを随時発信する「自由通信」がある。この課題通信のテーマをメンバーと毎月話し合っており、自分が関心のある記事以外の出来事にも目を向けるきっかけになっている。また、記事内容で疑問に思ったことは自由通信で新聞社に問い合わせしており、得た回答を井戸端会議の中で伝えている。

昨年3月からは、公民館講座の講師を務められた熊日新聞NIE専門委員の越地真一郎先生が約30分間のミニ講座を開講してくださり、学びと知識の幅が広がった。新聞記事のある部分を伏せてそこに回答を入れるというクイズ形式の手づくり資料もあり、楽しんで学ぶことが出来ている。先生のこれまでの豊富な知識の中から、「時事問題を楽しく」「記事にみる男女参画」などの講座を受けた。「写真…情あり、怒りあり、異議あり！」というテーマでは、写真をめぐる様々な受けとめ方を学んだ。新聞報道では、写真も重要なメッセージなのだとあらためて思った。

II NIE全国大会での発表

2010年7月末に開催された第15回「NIE全国大会・熊本大会」で、自主講座について私が事例発表を行うこととなった。発表の依頼があったから、多くの新聞社の事前取材を受けた。講座の取材に2時間付き合ってくれた記者から「大きな社会問題というより、片隅の小さなことから大きな事に繋がっていくのではないか」という意見をいただいたことは、まだ方向の见えない自主講座の大きな励みになった。

当日は、1,700人を超える参加者があった。「しんぶん井戸端会議」と題した私の発表には、「結

論は出なくてもみんなで新聞を楽しむといった、井戸端ならではの自由な発言の場があるのはよい」といった反響があり、NIEへの関心の高さが伺えた。

II 「地域NIE」として地道な活動を

「しんぶん井戸端会議」は、この5月で3年目を迎えた。2年間でメンバーの新聞に対する見方がどう変わったかを聞いてみると、①自分の考えと他の人の捉え方の違いで思考の幅が広がった、②新聞を読む時間が増えた、③家族との会話が多くなった、④同じ記事でも男性と女性の捉え方の違いがあって興味深く教えられることが多い、⑤あまり発言はしないけれどこの講座に参加するのは楽しい、などの意見が出た。

私のスクラップノートは、「井戸端会議」を始めてから4冊目になる。毎日の記事で気づいたこと、感じたことを切り抜いて赤線を引き、次回の「井戸端会議」に備えている。こうしてみると新聞には、その時々政治、経済、社会、スポーツの動きや世界情勢、身近な暮らしに直結した医療、介護、県内各地の行事やイベント紹介に加えて読者参加の投稿欄など、1日分にたくさんの情報とともに、文字どおり「喜怒哀楽」が詰まっていることに気づかされる。

2年間、進行役を務めてきて今、言えるのは、新聞には、①人前で話す、②人の話を聞く、③未知のことを知る、④伝えることで交流が生まれる、⑤視野が広がるなど、「学ぶ力」があるということである。

5月から3年目の活動に入るが、記事を鵜呑みにせず批判的な視点で読むこと、1つの事柄も見める角度で違うということを念頭に置き、新聞を楽しみつつ、「しんぶん井戸端会議」が活発な意見交換の場となるよう、「地域NIE」として地道な活動を続けていきたい。

こが ゆみこ NPO法人ワークショップ「いふ」理事。「地域密着型サービス」評価員として県内各地のグループホーム、小規模多機能事務所の評価に当たる。「熊本県高齢者介護施設ガイドブック」(2009年、563施設の紹介)の制作に携わる。新聞投稿歴38年間の掲載投稿をまとめた自費出版本を4冊刊行。